園の取り組み事例（2021年2月中旬取材）

フレーベル西が丘みらい園（東京都北区・私営）

園の理念を守りながら、新しいツールを活用し、より豊かな園をつくる

お話ししてくださった先生

フレーベル西が丘みらい園
園長
汐見和恵先生

取り組みのポイント

- コロナ禍においても、一人ひとりを大切にするという保育理念の実現を、一貫してめざす。
- 行事は形態を再考したり、オンラインツールを活用したりして、柔軟に対応する。
- 保護者とのコミュニケーションや保育者研修に、オンラインツールを活用する。
- 保護者とは日頃から強い信頼関係にあるため、コロナ禍の大変な状況も率直に伝えて、ともに困難を乗り越える。

子どもが自分自身を育てられるように、一人ひとりを大切にする

子ども主体を徹底して保育のあり方や保育環境を工夫する

フレーベル西が丘みらい園は、株式会社フレーベル館が、子どもが育つ園を本気でつくろうという思いをもって、2018年に開園しました。その保育理念は、「一人ひとりが大切にされる園」という言葉に集約されます。開園から3年間、汐見和恵園長を中心に、保育理念をいかに具体的な保育に落とし込むかを話し合いながら試行錯誤してきました。汐見園長は次のように説明します。

「私たちがめざすのは、子どもが自分自身を育てられるような保育です。保育者が一人ひとりの思いや興味・関心に寄り添い、1人の人間として尊重することで、子ども自身が主体的に探究して知を獲得したり、体験を通して感性を身につけたりして、人とのつながりの中で学んでいきます」

日常の保育は一斉型の活動ではなく、子ども同士が「今日は何をしようか」「どこで遊ぼうか」などと話し合い、さまざまな遊びが同時に展開します。保育者は子どもたちがそれぞれの思いを実現できるようにサポートします。保育環境にも多様な遊びを生み出す工夫が随所に見られます。個々の興味に沿って遊びに集中できるように、保育室をついたてで仕切ったり、園庭には築山や土管のトンネルを設置したり、四季折々の植物の成長を楽しめるガーデンをつくったりして、子どもが居場所を見つけやすい配慮をしています。

毎朝の集会で見られる子どもの姿にも、園の保育方針がよく表れています。開始時間に合わせて集まる子どもが多い中、遊びが一段落してから参加したり、最後まで集団に加わらず離れた場所で歌だけ一緒に歌っていたりする子どももいます。

「子どもの思いや状況はさまざまなので、参加するタイミングはそれぞれが決めてよく、参加しない自由もあると考えています。『9時に必ず集まる』

ことを保育者が当然と考えてしまうと、いろいろな参加のしかたがあるという見方ができず、結果として子どもを否定してしまいます」（汐見園長）

職員会議でエピソード記録を発表 保育者の共通理解と資質向上を図る

そうした保育を丁寧に実践するためには、保育者が一人ひとりの子どもの思いをしっかりと捉え、それぞれに合った援助を行うことが欠かせません。

「2018年の開園時には、さまざまな保育経験者が集まる状態だったため、まずは保育理念とそれを具現化するための保育のあり方について、共通理解を図る必要がありました」（汐見園長）

そのために開園時から続けているのが、月1回、2人の保育者がそれぞれエピソード記録やドキュメンテーションなどをもとに、子どものエピソードを発表する取り組みです（**写真1**）。発表者は、エピソードとともにそこに見られた子どもの育ちと自身の学びを述べ、参加者全員が感想を語ります。さまざまな視点から子どもの姿を捉えられるように、調理師や事務員などの職員も参加します。

「一人ひとりを否定せずに尊重するという姿勢は、保育者に対しても同様です。発表者の保育のあり方ではなく、子どもの姿を語り合うので『とてもすてきな姿が見られたね』『そこに着目したのがすごい』などと肯定的なメッセージを送り合い、子どもの見方を深めていきます。保育の喜びとめざす保育の考え方を共有しながら、保育者同士の関係づくりにも力を注いできました」（汐見園長）

子ども一人ひとりの思いに基づく援助に注力できるように、業務の効率化も推進しています。登降園管理や保護者への個別連絡を行うICTシステムを導入し、園だよりや給食献立表をデジタル画面で送信したり、保護者が誕生会や行事の写真をダウンロードできるようにしたりしています。

計画や記録類も、各クラスに設置したパソコンを使って、保育者の手が空いた時に作成できるようにしています。月案と週案は開園当初から試行錯誤を続けており、現在は月案の下に4週間分の週案をつけることで、保育の流れを把握しやすくするとともに省力化につながる作りにしています。毎日のクラスごとのドキュメンテーションは、担任がパソコンを使って30分ほどで作成しますが、このドキュメンテーションを保育日誌の活動内容と兼ねることで、保育者の負担を軽減しています。

写真1　毎月行うエピソード記録やドキュメンテーションの発表は、園理念の共有、保育者の資質向上、さらには子どもの姿について前向きに語り合う園文化の醸成など、多くの効果をもたらしています。

同園ではICT機器を保育にも活用しています。汐見園長が海外出張の際に画面越しに子どもとやり取りをしたり、同時期の北海道と沖縄の動画を見せて地域性の違いをイメージできるようにしたり、外出時に子どもがカメラを持って自由に撮影できるようにして作品を展示したりなど、保育の可能性を広げるさまざまな試みを行っています。

行事は内容や場所を再考し オンラインによる実施も

コロナ禍においても従来の園の方針に変更はありません。2020年春の緊急事態宣言による登園自粛を経た後も保育内容はほとんど変えず、保育者は状況に応じて表情が子どもに伝わるように透明なマウスシールドを着用して保育を行っています。

行事に関しては、一部の実施形態を変更しています。もともと同園では、保護者に見せるために練習を必要とするような行事は行っていません。遊びの中から発展し、子どもが保護者に見せたいと思ったものを見てもらい、保護者自身も楽しいと思える活動にすることを重視しています。

そうした行事の1つが、自然を感じながら体を

動かして楽しむ「プレイデー」というイベントです。2020年は、人が密集する状況が生じないように場所や内容を再考し、森や原っぱを散策した後、屋外で自然物を使って作品づくりを楽しみました。

また、子どもと保護者が一緒にアート作品を制作する「親子でアート」というイベントは、2020年は子どもが散歩で拾ってくる木の枝を題材に、ウェブ会議システムを活用して開催しました。作品のイメージが湧くように、約2週間前から保育者が作った作品を保護者の目につく場所に展示し、子どもと相談しながら材料を家に持ち帰れるようにしました。当日は、講師役の保育者とともに制作し、全員がそれぞれの作品を見せ合いました。

オンライン研修の受講を推奨し保育者の成長をサポート

同園では、研修にもウェブ会議システムを積極的に活用しています。登園自粛中は、保育者全体やクラス、フロアごとなど、さまざまなグループがオンラインでつながり、研修や話し合いを行いました。また、前述した子どものエピソードの発表は、毎月、保育終了後の夜間に実施しているため、これまで早番の保育者は、終業後にも待機している必要がありました。現在は、自宅からオンラインによる参加も可能にして、保育者の負担軽減につなげています。

さらにコロナ禍を機にオンラインによる外部研修が増加したことから、受講費を園が負担するなどして保育者に積極的な研修参加を呼びかけて、保育者の成長をサポートしています。

「これまでは、主に業務効率化のためにICT機器の導入を進めてきました。今回のコロナ禍で新たな取り組みとして保育者研修などにも活用することで、園運営の新たな可能性が広がったと感じています」（汐見園長）

今こそ保護者との信頼関係を強め、困難を乗り越える

保護者会や新入園児説明会にオンラインツールを活用

新型コロナウイルスの感染防止対策のため、保護者とのコミュニケーションの機会が制限される中、同園ではICT機器を、子どもの育ちを伝えることにも積極的に活用しています。

「保護者との関係を築く上でもっとも大切になるのは、保育の内容やそこでの育ちをしっかりと伝えることです。子どもが毎日を楽しく過ごし、成長していると信じられるからこそ、保護者は安心して園に預けられるのです。コロナ禍においても保護者とのコミュニケーションの手段を工夫して、保育理念や活動への理解を求め、一人ひとりの姿や育ちを伝えていくことが大切です」（汐見園長）

2020年4月の保護者会は中止としましたが、9月の保護者会はウェブ会議システムを使って実施しました。事前の問い合わせもほとんどなく、実施のハードルは想定より低かったといいます。

そうしたオンライン保護者会に対しては、「子どもが隣にいても参加できる」「平日の夜や土曜日に園に行かなくてよいので助かる」など保護者の反応はよく、その後、子育て講演会や年度末の保護者会とクラス懇談会もウェブ会議システムを用いて実施しました。さらに2021年度の新入園児説明会もウェブ会議システムで実施しました。

「小さな子どもを連れて園まで来るのは大変ですし、里帰りして出産･育児をしている保護者からは、『説明会だけのために戻らずに済んで助かった』とも言われました。オンラインツールの活用は、感染防止対策の観点だけでなく、子育て支援の新たな可能性も示していると思います」（汐見園長）

一人ひとりの保護者と率直にやり取りできる関係をつくる

一方、2020年10月には、感染防止のために十分な距離を保つなどの対策をして、個人面談を実施

しました。オンラインではどうしても一人ひとりの表情や雰囲気が伝わりづらいため、面と向かってコミュニケーションをとることで、保護者との信頼関係の構築とともに、保護者の不安を和らげる効果もありました。

同園では普段から、保護者との関係性づくりの土台として率直なやり取りを心がけ、保護者が気づいたことは何でも伝えてもらうようにしています。あるとき、泥遊びで子どもの服が汚れると町を歩きづらくなるため、泥遊びをする日を教えてほしいと言った保護者がいました。汐見園長は「子どもの主体性を大事にすると泥遊びをする日は決められないから、いつも汚れていい服で来てほしい」と答えながら、ふと気づいたといいます。

「私たち保育者の側に、『園からのお願いは子どものためのものだから、保護者が従うのは当たり前』という前提があったのではないかと思いました。思わぬところで保護者に嫌な思いをさせているかもしれないことに気づいて、それを伝えた上で、率直に保護者に謝りました。また、その経緯を他の保育者とも共有しました」

お迎え時の保護者との会話は、その日の子どもの姿を伝えながら保護者との関係性を深める機会として、大変重視しています。以前は保育室の中に入れましたが、現在は感染防止のために玄関でのお迎えになっています。そこで、毎日、玄関に各クラスのドキュメンテーションを掲示するとともに、担任が短時間でも必ず保護者と会話をするようにしています（**写真２**）。こうした日頃からの関係性があるからこそ、オンラインでのコミュニケーションもうまくいくのだと捉えています。

新型コロナウイルスの収束時期がいまだ見えず、保育者に大きな負担がかかる状況が続いています。汐見園長は、その状況を保護者に率直に説明し、園や保護者が協力し合える関係性づくりにも努めています。例えば､保育者が少しでも休めるように、保護者に対して可能な日は通常より早めにお迎えに来てくれるようにお願いしました。すると、多くの保護者が積極的に協力し、保育者が30分ほど早く退勤できる日もあるといいます。

「保護者を信頼しているからこそ、園の大変な状況を伝えてお願いをしました。保護者もまた、園を信頼してくれているから、協力してくれたのだと思います。そうした信頼関係があれば、困難な状況も乗り越えていけると思います」（汐見園長）

写真２　感染防止のため、夕方のお迎え時には、一度に玄関に入れる保護者を２人までとしています。その上で、ドキュメンテーションを活用するなどして、短時間でも毎日必ずコミュニケーションをとり、子どもの姿を伝えるようにして、保護者との信頼関係を築いています。

汐見園長から保育者の方へのメッセージ

私が保育者によく話すのは、「気持ちよく、美しく、穏やかに、暮らす」ということです。園内を整理整頓して、美しさを感じる環境を整えることで、子どもによい影響をもたらす園文化が形づくられますし、保育者が穏やかな気持ちで過ごせば、子どもは伸び伸びと育つでしょう。きっと保護者も園で過ごす時間を心地よく感じて、良好な関係を築けるはずです。

そうした園運営における園長の役割は、一つひとつ指示を出すのではなく、めざす方向を指し示すことだと考えています。そして、保育者が動きやすいように見守り、支えながら、それぞれの個性や得意なことを生かし合える園づくりをめざしたいと思います。

フレーベル西が丘みらい園

2018年（平成30）年、株式会社フレーベル館が子ども主体の保育を理念として開園。保育理念に「一人ひとりが大切にされる園」を掲げる。

◎ **園　長**：汐見和恵先生
◎ **所在地**：東京都北区赤羽西 6-2-20
◎ **園児数**：60人（０～５歳）